

| | |
|--------------|---|
| Title | 経営組織における正義の実現：ベンサム理論を基軸にして |
| Author(s) | 宮本, 俊昭 |
| Citation | 大阪大学, 2002, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/43296 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。 |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

| | |
|---------------|--|
| 氏 名 | 宮 本 俊 昭 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 (経済学) |
| 学 位 記 番 号 | 第 1 6 7 3 1 号 |
| 学 位 授 与 年 月 日 | 平 成 1 4 年 3 月 2 5 日 |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 経済学研究科経営学専攻 |
| 学 位 論 文 名 | 経営組織における正義の実現；ベンサム理論を基軸にして |
| 論 文 審 査 委 員 | (主査) 助教授 小林 敏男 (副査) 教 授 浅田 孝幸 教 授 高尾 裕二 |

論 文 内 容 の 要 旨

【趣旨】

本稿の目的は、総合的な視点から『正義』の概念を定義し、その正義概念を現実の経営組織において実現するための『組織倫理モデル』を、「ベンサム理論」を再検討することにより構築し、その仮説の妥当性を検証することである。

本稿の第一章では、現代組織の病的実態を解析し、正義概念の混乱の深刻性と正義議論の緊要性に言及する。次いで、この正義の課題に、経営倫理研究がどのように取り組んできたかの歴史的経緯を検討し、新しい正義論を展開するために必要となる「コミュニケーション構造」、「相補性理念」、「価値整合理念」、「組織倫理枠組理念」および「量的測定体系」の五つの検討課題を抽出する。

第二章では、前章で抽出された討議課題のそれぞれについて論究し、「総合的な正義」の概念定義とそれを具現化するための諸要件を検討する。

第三章では、二章で提示した討議課題の総合的検討の結果を踏まえて、「経営組織における正義とは何か」について論究し、「価値軸モデル」を使った本稿の『正義』の概念定義を行う。

第四章では、新しく定義された本稿の正義概念を、現実の経営組織において体現するための「理念と方策」について論究する。その検討のために、本稿の正義概念の構成要件から判断して、最も本質的な正義体系である「ベンサムの量的正義論」を基底理論に選定する。ベンサム理論には、幸福認識の時代的ズレ、幸福計算の非実践性、分配論の欠落、最大多数理念の不条理性および倫理準則の限定性などの多くの限界がある。ここでは、それらの限界を克服するための諸理念と具体的手法を工夫する。

以上の各章の考察を踏まえた上で、第五章では、「期待達成満足原理」、「最大多量の最大幸福原理」、「倫理準則命題」、「倫理計算体系」および「互惠的分配原理」の五つの命題から構成される、本稿の『組織倫理モデル』の仮説を提示する。そして、この仮説の妥当性を、社会科学的知見、関数定式や論理式、調査データの統計的推計などにより実証的に検証する。最後に、今後の課題として、新仮説に基づいた経営組織戦略と具体的な管理戦略の展開の方向性について言及する。

以 上

論文審査の結果の要旨

本論文は、昨今緊要の課題になりつつある経営倫理について、規範論の枠に拘泥することなく、実践可能性を強く意識しその打開策を模索した意欲的な論文である。先行研究に関する渉猟はもとより、学際的分野にまで立ち入り広範な文献を網羅したことは評価に値する。加えて、経営倫理の向上のために、正義概念を導入し、ベンサム理論に新解釈を加えながら、正義の操作化に向けてさまざま工夫を凝らしたことは、創造的な価値も有している。もっとも、論旨の展開において若干冗長な部分や、あるいは操作化において独善的な色彩が幾分見受けられるが、それらは、本論文自体の学術的価値を決して損なうものではない。よって本論文は、博士（経済学）の学位に十分値する、と判断する。